

## 日の丸に取り込まれた沖縄

先日、日本、韓国、アメリカ、カナダ、キューバ、メキシコ、プエルトリコ、ベネズエラ、コロンビア、オーストラリア、イタリア、オランダの十二カ国が東京に集まり「世界アマチュア野球選手権」が開かれた。あまり野球とは縁のなさそうな国も眼につくけれど、全体の水準はかなり高く、アメリカや日本のような野球「老舗」国もたやすくは勝ち進めない。事実、今大会の前評判でも優勝候補筆頭とされたのは、ここ数年来圧倒的な強さを見せているキューバだった。キューバ選手は、アメリカ大リーグに劣らぬパワーを持っている、キューバチームの監督は、来日後、日本のプロ野球をテレビで見て、失礼だが十回に九回は勝てるだろう」と言ったそうだ。

総当たりリーグ戦が進むうちに、優勝の可能性は、予想通り毎試合を大差で勝ち抜いたキューバと、それを一敗で追いつ日本とに絞られた。後樂園球場で行なわれた両国の試合は、地元の声援を受ける日本が善戦し、爆発的破壊力のキューバ打線を僅か一点に押さえたが、逆に日本打線も沈黙、結局一対〇でキューバが逃げ切り、優勝を決めた。

この試合を僕はテレビで見ていたのだが、九回裏、日本の攻撃が終ると同時にキューバ選手はベンチかち全員飛び出し、その中の二人が、大きなキューバ国旗を両側から広げて持つと、駆け足で後樂園の外野を一周しはじめた。満面笑みの二人の背後に勢いよくたなびくキューバ国旗の光景は悪くなかったが、僕は、些か複雑な気分にもなっていた。もし、日本チームがこれと同じ事をしたら僕はどう感じるだろう？ と考えたからである。

仮に日本が勝ち、日本選手が日の丸を手にして走り出す様子を想像してみる。多分僕はチツと舌打ちし、「反動！」と叫び、「右翼の陰謀か？」と妄想を逞しゅうしさえるかもしれない。

キューバの国旗なら快いほどの光景が、日の丸であると極めて不快な物となってしまう。この感情を次のように理論づけることは実に容易だ。社会主義国キューバの国旗が革命を体现しているのに対して、日の

丸は日本帝国主義・侵略戦争の血塗られた歴史に汚れているから、見る者を自然に反感・嫌悪感へ導く。

この容易な理論づけではもちろん不十分で、僕にとって国旗の問題は大きな疑問でありつづける。「血塗られた」日の丸を素朴な敬愛の念で見ている日本人は数多く実在し、その人々が揃って反動精神の塊りと考へてはあまりに短絡過ぎるだろう。

浦山桐郎監督・脚本による『太陽の子(てだのふあ)』(原作・灰谷健次郎)を見ていると、画面に何度も日の丸が現れる。その日の丸のいずれもが、やはり反動的な日本を象徴する形でのみ登場している。物語は、ほぼ建国記念日に始まり、ほぼ天皇誕生日に終る。二つの日の丸に挟まれた二カ月半ほどの時間の中で、神戸港に近い小さな食堂「てだのふあ沖縄亭」を軸とする人々の過去と現在とが描かれる。

食堂の娘「ふうちゃん」こと芙由子(原田晴美)は小学校六年生。女子サッカー部に入っていて、可愛くて活発で頭が良く、食堂へやって来る人々のアイドルである。父親・直夫(河原崎長一郎)も母親・菊江(大空真弓)も沖縄で生まれ育った人間だが、神戸に生き沖縄を知らぬ芙由子は、沖縄に対して格別の屈託も思い入れも抱いていない。芙由子は、彼女を「沖縄の子」と呼ぶ沖縄出身の工員「ギッチョんチョん」こと兼城(石橋正次)に向かって、幾らかおどけ気味ながらも「あほう、わたしは神戸の子や」と見えを切る。そんな無邪気で苦勞を知らぬまさに「太陽(てだ)の子(ふあ)」。芙由子も、次第に沖縄の歴史に眼を向けはじめ。四百人の中からオーディションで選ばれたという新人・原田晴美は文字通り現実の「神戸の子」で、この映画に出るまでは多分沖縄など全く無縁の一少女であったろう。従って、原田晴美と芙由子とは、その基盤こそ違え、二人三脚のごとく同時に沖縄を捕え認識して行く。初めは子供芝居風だった原田の顔つき・仕草が次第次第に変化し、深みを帯びる過程は、彼女が単にカメラに慣れた、演技力を増した、という類の物ではなく、もっと一個の人間の内面変化であり、その過程は「太陽の子」の映像の最も面白い部分であると思う。

父親・直夫はノイローゼ気味で時々発作を起こし、菊江や芙由子を不

安にさせる。芙由子にも、直夫の発作の原因が戦争に関連していることが薄々判ってくるけれども、直夫は戦争の話は一切彼女にしようとしてない。そこで、芙由子は、菊江や兼城から沖繩の歴史を少しずつ聞き学ぼうとする。

直夫の発作の原因は、観客に対しては、彼（および菊江）の回想の形で明らかにされる。沖繩戦当時、少年兵だった直夫は負傷し、同じ八重山出身の女学生・嘉納ミツエ（大竹しのぶ）に助けられる。数日後、直夫は、ミツエたち女学生が榴弾で集団自決する現場を目撃し、彼女たちに何もしてやれなかった自分を恥じ、死のうと思つが果たせぬまま生き延びる。

直夫には、戦後の沖繩への後ろめたさもつきまとつている。昭和三十八年、菊江と共に神戸へ駆け落ちした彼には、復帰運動に挺身する友人・国吉を残して日本本土へ逃げた負い目がある。復帰後、米軍基地反対運動にも携わりつづけた国吉が、五年前に疲れ切つて死んだことは、直夫を一層苦しめる。菊江の手配により、一家三人は、直夫のいとこを頼つて、彼の故郷波照間島へ帰ることになるが、当日の早朝、直夫は、僕の頭の傷みは、なおらない」と走り書きを遺して自殺する。しかし、直夫の苦悩は、それほど切実なものとして観る者に伝わって来ない。映画が始まった時点で直夫は、沖繩に対する二つの負い目を既に担つて登場している。沖繩戦から三十五年、沖繩から逃げ出してから十七年の長い時間が経っている計算だが、その間直夫がどのような気持ちで生きて来たのか、また、芙由子に沖繩をどう伝えたのか（伝えなかったのか）が全く現れないために、二つの負い目がやや凡庸で薄い物となった嫌いがある。だからこそ、菊江と一人で直夫の遺骨を持って波照間島へやって来た芙由子は、父の幻影を見、それを追いかけるが捕えることの出来ぬまま、お父さん！ほんとのことを教えて欲しい」と泣き崩れなければならない。

直夫との関連はともかく、ミツエたちの集団自決シーンは大竹しのぶの熱演で印象に残る。同じ浦山桐郎監督による『青春の門』筑豊篇・自立篇に出演した頃から、僕はいかにも虐げられた健気な日本の女をベッタリと演じる大竹をあまり好きではない。しかし、この自決シーン

の大竹は百パーセント適役で、無惨に死んで行った女学生たちの哀しさを漂わせている。

大竹とは対照的に素人の生で素朴な存在感をもって登場するのが、食堂の常連客ロクさん（松田豊昌）である。終盤に近く、ロクさんが静かに沖縄を語る場面は、『太陽の子』のクライマックスとなる。

兼城に連れられて食堂へ顔を出すようになった沖縄出身の少年・知念キヨシ（当山全弘・新人）はグレかかっていたが、食堂で芙由子たちと接するうちに心がほぐれ、ついには食堂で働き出す。ある時、芙由子と町を歩いてきたキヨシは昔の不良仲間と出会う。もうお前らとつき合っつのはかんにんしてくれや」と言っキヨシは、いたぶる不良たちから無抵抗に殴られていたが、「オキナワは根性ないのう」「オキナワモンはしゃあないで」と罵倒されるや不意に「オキナワモンと笑ったからには、おまえら敵や」と石を握って不良たちを叩きのめし、お互いに大怪我を負う。

中学生になっただばかりの芙由子がロクさんと連れ立ち、入院中のキヨシを見舞うと、一人の刑事が事情聴取を行なっている。何度か警察の厄介になっただ前歴を持つキヨシは反抗的だ。ロクさんは刑事たちに、キヨシの沖縄の人間としての苦しみ・不幸を理解した上で調べるよう求める。刑事の一人（大滝秀治）は、キヨシは「郷土愛で甘やかされた」のではないかと言う。ロクさんが初めて大声で「あんたたちは、オキナワモンと言われた時の、この子のかなしみがわからんのかッ！」「と叫ぶ。刑事は「法の前には沖縄もくそもない。みんな平等だ！」「と叫び返す。するとロクさんは、そうか。平等か。ほんとに平等かね」と呟いて上着とシャツを脱ぐ。ロクさんの右手は手首のあたりでいびつに失われている。ロクさんは訥々<sup>と</sup>と語る。

沖縄戦の最中、日本兵が、国のため天皇陛下のために死ぬ、とロクさんたちに手榴弾をくれた。皆が固まり、真中で信管を抜き、人々は死に、ロクさんは手を飛ばされた。その前には、壕の中で、やはり兵隊に国のためと命令されて、ロクさんは生まれたばかりの泣く赤ん坊を自分の手で絞め殺した。そんな体験を秘めていたロクさんは、知念キヨシといっぴりの少年を見るだけで、かれの人生の中に、不公平にされた沖縄

がいつぱいつまっているということを知ってもらいたいんだ。わしの言うことは、おかしいかね」と結ぶ。刑事は黙って上着とシャツを拾い、「服を着て下さい」とロクさんに差し出す。

「思想運動」二〇一号掲載の浦山監督へのインタヴューによれば、ロクさんを演じたこの人は、沖縄南部戦線でひめゆり部隊と一緒に戦っている。出演依頼に対して、自分がいま生きのびていることは、いつも申しわけないと思っていて、沖縄で死んだ人のためにもやらせてもらいます」と言って引き受けた、という。だから、ロクさんの独白は単にドラマティックな物ではなく、一個の松田豊昌ゆえの独白ともなっていて、迫真力を備えた。

だが、決定的に物足りないのは、その独白に対して刑事が急に優しく「服を着て下さい」としか答えずに、画面が変わってしまふことである。『太陽の子』には、沖縄あるいは沖縄人を絶対的に讃える言葉が幾つも出て来る。「沖縄の子ですよってねえ」（沖縄の人は）上等な人間が多い」「みんな正直で、やさしくて人のめんどうもようみる」「沖縄の女で、ひどい人はひとりもあらんよ」「沖縄の人間は、ほんまの勇気を、もってるんや」。これらの言葉は総てその通りかもしれない。ただ、沖縄人は誰に較べて「上等」だったり「正直」だったり「ほんまの勇気」もって「いたりするの」だろうか。沖縄人（ウチナンチュウ）に對立するのは当然本土・内地人（ヤマトンチュウ）である。『太陽の子』に登場する本土人は全く精彩がない。厚く描かれている沖縄人に比して、彼らのイメージは痩せ、芙由子の担任で沖縄に関心を持ち、食堂にやって来ては感慨にふける梶山（伊藤敏孝）なども、沖縄に打ちのめされるばかりで弱いのだ。特に刑事の場合は、曲がりなりにも日本権力を代表してロクさんと対決しているはずで、それが、服を着て下さい」でスコスコ引っこ込んでしまつては、ロクさんの立場がないではないか。

浦山監督はこの映画に、芙由子をはじめとする沖縄の人々に対峙する物を直接出さない。代わりに現れるのが日の丸であり、天皇誕生日のテレビ画面で参賀に応える天皇の笑顔ではある。先のインタヴューで、浦山監督はこう述べている。「日の丸というのは、明治以後、そして第二次大戦のときに、沖縄の人間が日本人であることを証明したい、日本人

と一体化したいというその願望をあらわしている。日の丸のために自分を捨てて、だまって死んでいったという歴史が沖繩の人びとにはある。だから、日の丸を見るときに沖繩を忘れてはいけな<sup>い</sup>んではないかという意味で日の丸が映画に出ている。(中略)日の丸のなかに沖繩の人びとを犠牲にしたことがあるということをおも<sup>い</sup>たかった。しかし、その見地に立てば沖繩人だけでなく、多くの本土人が日の丸の犠牲になったことも明らかであろう。『太陽の子』は沖繩を重く中心に据え過ぎたために、沖繩が過度なナショナリティーを帯びてしまい、本土との対立を図式的に招いているように思う。もっと厚味のある、もっと強い本土人、その権力が具体的に登場するほうが、沖繩と本土との関係をより痛烈に描きえたのではないだろうか。

波照間島で父親の幻影を追った芙由子は、「日本最南端」と刻まれた石台に伏して泣き崩れるのだが、その前方のポールにも日の丸が翻っている。芙由子は多分これから「沖繩の子」として生きて行くのだろう。沖繩を知る、即ち自らの基盤を知り、自分を知る。その「沖繩ナショナリズム」が、芙由子もあくまで日の丸に取り込まれた「日本人」である事実の「日本ナショナリズム」とどう衝突するかどう融和するか、映画は語らない。

ただ、泣き崩れる芙由子の後、ラスト・シーンに真赤な太陽のアップが映り、見ていると(スタッフ・テロップが流れるうちに)これは落日であることが判る。『太陽の子』の最後に沈む太陽が映る。それは、全編ドアップりと沖繩に浸かっていた浦山監督がチラッとだけ見せた毒だったのかも<sup>し</sup>れない。